



どろぼうづえんの
月夜

さく：花岡大学
え：前田晃宏

どうぶつえんに、夜がきました。

ライオンは、オリのなかを、しずかにあるきまわりながら、ときどき、たちどまって、耳をすませました。となりのトラのオリから、オリのでつぼうに、からだをぶっつけているらしい、ドスッ、ドスッという音がきこえてくるからです。

(あんなに、いいきかせてやったのに、わからないやつだ。)

でも、はらをたてて、このままかまわずにおれば、かならず、わかいトラのだいじないのちが、なくなることになります。

このあいだ、アフリカから、ここへきたばかりのトラは、にんげんのことなど、なんにも知らないのです。もういちど、いいきかせてみようと、ライオンは、おもいかえました。

それで、

「トラくん、トラくん。」

と、やさしく声をかけました。



10

「よさないか、ほんとに。なるほど、にんげんよりもぼくたちのほうが、ちからは、うんとつよいよ。それはたしかだ。でも、ちからだけで、しょうぶがつくのは、ぼくたち、けだもののあいだだけの話なんだよ。にんげんには、ちからよりも、もっとおそろしい、ちえというものがある。オリをやぶって、とびだしてみたところで、むだなことなんだよ。」

すると、わかいトラは、

「ふん。」

と、はなでわらって、こたえました。

「けだものの王さまだと、いばっているライオンさまも、おいぼれると、まるでシマウマのように、いくじがなくなるんだね。あきれたものだ。よけいなせわをやかないで、オリからとびだしていくぼくを、ゆびをくわえて、見ているがいい。」

ライオンは、むっとしましたが、なんにもいわないで、また、あるきだしました。

でも、なまいきな、わかいトラを、すこしもにくむきには、なれませんでした。

そして、こわれているという、オリのかぎが、からだをぶっつけて、ゆさぶったぐらいで、おちたりしないようにと、ひそかにいのっていました。



10

しげった木々のあいだにある、いくつものオリの中で、いろいろなどうぶつたちは、みんな、やすらかなねむりに、おちてるらしく、あたりは、しんとしずまりかえていました。

しばらくして、月ができました。

どうぶつえんは、月の光をあびて、ひるのように、あかるくなりました。

するとそのとき、とつぜん、ガチャンという、はげしい音がしたかとおもうと、それといっしょに、「ウオッ！」

と、ほえたてる、ものすごいトラのなきごえが、しずかな夜のどうぶつえんに、ひびきわたりました。

ライオンが、はっとして、ふりむきますと、とくいそうに、オリのまえのひろばへでてきた、わかいトラが、すこしおどけていうのです。

「おいぼれライオンさま。ぼくは、これから、うまれこきょうのアフリカまで、まっすぐに、つっぱしってかえるつもりですが、なにか、ことづけでもあれば、いたしましょう。」

だが、そんなおどけたりしているところではないのです。



ライオンは、どうぶつえんの、かかりの人たちがとまっているへやに、パッとでんきがともったのに、きがついていました。

いや、その人たちが、すぐ、ばらばらっと、そとへとびだし、あちこちの木かげにかくれたことも、していました。

それで、あわてていました

「おい、トラくん。おそろしいてっぼうが、きみをねらっているのだ。はやく、もういちどオリのなかへ、かえってくれ。はやく、はやく。」

「うわはっはは……。」

はらをゆさぶって、わらいながら、トラは、こたえました。

「おや、おや。おそろしいものは、にんげんのちえだという話だったが、こんどはまた、てっぼうだなんて、へんなものがあるんだね。」

「いや、それが、にんげんのち之というものさ。」



10

「ふん、それなら、ひとつ、そいつとぼくは、たたかってみてやろうよ。さあ、でてこい、にんげんのちえとかいうやつめ！」

わかいらが、かたをいからせて、いばって、あたりを見まわしたときです。

しずかな空気をふるわせて、ダン、ダンと、するどい、てっぽうの音が、ひびきわたりました。

「あっ！」

と、さげんだライオンは、いきなり、なにも見たくないというふうに、かたく目をつむって、ためいきをつきました。

「なにも知らないから、こんなことになったのだ。ああ、なにも知らないということは、みじめなことだ。」



ひろばのすなの上に、トラのからだは、ドドッと、たおれた音がしました。

そして、しばらくもがいているようでしたが、やがて、しずかになりました。

すると、かたくつむっているライオンの目から、ひそかになみだながれでて、それは、月の光のなかで、チカリと光りながら、ポロポロとこぼれおちました。



